夢窓幼稚園通信 第50号

2019年 10月 31日

夕方に遊ぶ子どもたちの影が、ずいぶん長く伸びる季節となりました。
夏の日とはもちろん、秋のはじめの頃ともすっかり違う陽の光を受け、私たちの心はその中に生きながらも、自分の内へと向かっていきます。
遠くから流れてくる歌声にうっとりと耳を傾けながら、静けさを心の中に広げます。
いつの日か… 遠い夏に拾い持ちかえった石を手の平にのせ、その冷たさを感じながら、波が打ち寄せる音や時の流れを感じます。
いよいよ深まっていく秋に、私たちはあらゆる感覚の門を開いて周囲の存在たちと出会い、自分の内に生かしながら、外の世界と内なる世界とをひとつひとつ結びつなげているのでしょうね。

子どもたちの色とりどりの遊びがどんどんふくらんでいきます。
ままごとのベッドが快適に工夫されていて、眠っている子が実に気持ちよさそうでした。
積木を使っての見立てた基地やお城も、広告の剣作りも見事に進化してきました。
子どもたちの言葉やアイデアが生命あるものとして、ますますゆたかになっていきます。
朝大好きな友だちがやってくるのを、たのしみに待っている子たちがいます。
帰りに「——ちゃん、ばいばーい。またあした！」と、無二の「仲間」があそこにもここにも…。
そんな子どもたちのひとつひとつの今も、秋のみのり・めぐみなのだと思います。

昨日は小さな「わかちあいのまつり」に皆で庭に集いました。
みつけた秋をお互いに教え合い、受けとり合うことでよろこびは倍増です。
「いちばん星を見つけたいのは誰かにそのことを伝えたいから」なのだと教えてくれた子がいましたが、分かち合うことが、誰かに大切なこと・うれしいことを届けるのが生きる大きな意味なのかもしれません。

すでにして大きないのちを分かち合って生きている私たちは、それぞれが創り出したり・発見したり、出会ったり・気づいたり…したことを、感動や驚きやよろこびと共にもう一度分かち合うことで、再びむすびつなぎ、あらためて"いのち"ある関係や社会を作ろうとしているのだと思います。

11月…収穫感謝のしめくくりからクリスマスへと、よき時を分かち合い共に過してまいりましょう！

園長 弁光泰雄